

鹿児島県加世田市のクロマツ林に自生するマツタケについて

鹿児島県林業試験場 石原 研 治

鹿児島県では、県北のアカマツ林の多い霧島山地方ではマツタケが自生し採集者が僅かに自家用、販売用に供している。一方南薩摩半島の加世田市附近ではマツタケに近似の茸を採集し一部の人が自家用、贈答用に費していることは知られている。昭和44年11月加世田市小湊の南高地（海拔高200 m）でこのマツタケ近似の茸を2個発見して、滋賀大学の本郷次雄教授の所へ鑑定を求めた結果、マツタケと回答を得たのでこの地方の茸をマツタケとして調査結果を報告する。

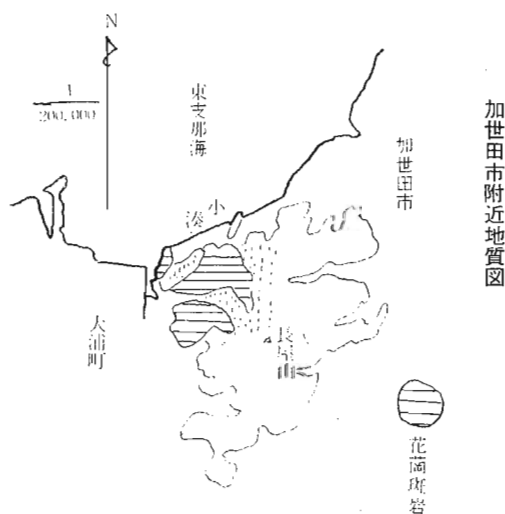
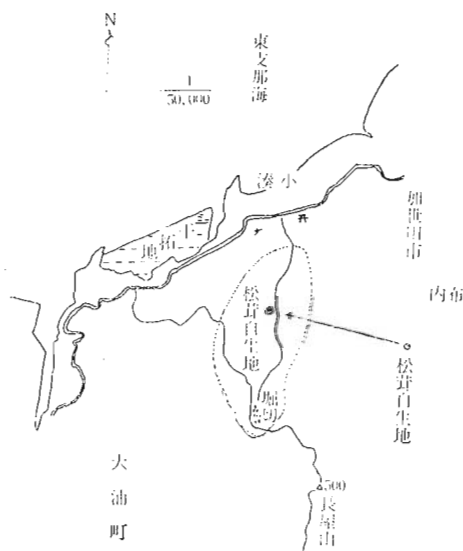
（1）マツタケが自生している林地況

今回マツタケが自生していた地域は加世田市小湊から長屋山（海拔高520 m）に至る途中堀切部落（海拔300 m）より北方の林地周辺のクロマツと雑木の混合林にして、何れの樹木も生育悪い疎林である。この附近一帯はクロマツ造林の多い所で造林成績は峯筋の土質の浅い所はその成績は良くないが、幾分低目の土の堆積した所は樹高も20 m近くまで伸びた孤立木もある程で成績は良い。林地の地質は花崗斑岩の変成岩の露出地又は風化した砂状の乾燥した未熟土という所であり砂質の深い所で10 cm、浅い所で1 cm内外の乾燥林地で地表面は林木の落枝葉層（LF層）が一杯にひろ

がっている。林地にはコシダを主としその間にトベラヒサカキ、クロキ、タイミンタチバナ、シャシャンボヤマモモ、クロマツ（樹高は非常に低い）が散在する砂質の土壌で、その間のクロマツの根元にマツタケが発生している。

（2）マツタケの評価と発生状況

マツタケは10月中旬より11月上旬まで発生している。従来マツタケはアカマツ林内に発生すると通説されているので、このマツタケはマツタケに似た茸として扱われ消費されてきた。発生場所を精通する者は附近の住民のみで他言しないためにその産額も少く殆ど自家用に消費する程度であった。採集者は林齢25年以上の林で、疎林の生育の悪い林で土質の浅い所を主として探し歩いている。マツタケの発生地点は代とか坪といい、発生には菌環を作ると云われているが、この加世田地方では、その発生時季には採集者が常時立廻りクロマツの根元附近は、地表の落枝葉有機物を掻きまわしているため、菌環の想像、確認することは難しい状態にあるが、茸の発生していた跡には多くの菌糸が見られる。



加世田市附近地質図